ドクター通信 ㉒

チック症について

市立総合病院神経精神科部長　安藤嘉朗

精神科の子どもの治療相談

最近は、精神科に対する世間の見方もだいぶ変わり、子どもたちも案外気楽に外来を利用してくれるようになりました。

我々の外来の新患のうち、児童・思春期の患者さんは一五％以上にもなっています。その内容は、小学生では登校拒否症やチック症が多く、そのほかに多動、かん黙症などもみられます。中学生になると登校拒否症が半分以上を占め、高校生年齢では対人恐怖症や思春期やせ症といった病気も加わります。

チック症について

今回は、子どもによくみられる『チック症』を話題にしたいと思います。

チックとは、一群の筋肉が勝手に素早く動いて、目的のない運動を繰り返すクセの異常をいい、運動性のチックと音声のチックに分けられます。運動性チックで多いのが目をパチパチさせる瞬目チックで、そのほかに顔しかめ、鼻のヒクヒク、首ふり、肩すくめなどがあります。音声チックでは、「ウッウッ」とか「アッ」という単純な発声をしたりせき払いのようにしたりするチックから、ある種の言葉を叫ぶチックまであります。更に、複数の運動性チックと同時に音声チックが一年以上にわたってみられる場合もあり、特にトゥーレット障害と呼ぶことがあります。

チックの発症年齢は二歳から十五歳。平均はおよそ七歳、男の子に多くみられます。

原因については、まだ十分明らかになっている訳ではありませんが、子どもの体質的な問題とともに、心理的な緊張を強める周囲の環境が影響し、抑えつけられた心のエネルギーがチックという筋肉の運動によって発散されるという説があります。また、子どもが成長していく過程での不安や心理的葛藤が関係するという説もあります。

チックがみられたら

それでは、子どもにチックがみられたらどうしたらよいのかということになりますが、まず知っておいてほしいのは、チックの多くが一時的なものだということです（一過性チック障害）。チックをやめさせようとしたり、とがめたりすることはかえって緊張を強め逆効果です。チックについては見て見ぬふりをし、子どもに緊張させる状況やストレスがないかどうか考えてみてください。負担を軽減してやるだけで有効な場合があります。

しかし、それでもチックが続く場合があります（慢性のチック障害）。目立たない場合には、あまり神経質にならずにそっと見守っていてよいのですが、激しいチックのために日常生活が妨げられたり、自ら悩んで委縮してしまっているような場合には、受診をお勧めします。また、チックと思っていたものが、受診の結果、てんかんの一種だったということもありますので注意が必要です。

チック症は、子どもたちが自由に自己表現できるような場を与えた心理療法と、家族のカウンセリングとで良くなることもあります。また、症状改善にはいくつかの薬が手助けになります。

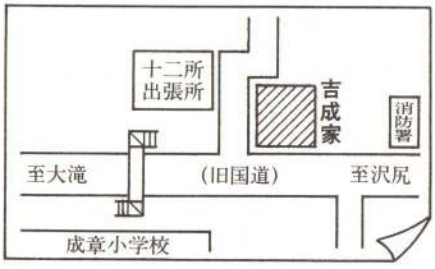
守りたい…○○
残したい…○○

並木・名園・名木 ⑩

吉成家の樅

○所　在・大館市十二所字上城7
○所有者・吉成　尚親　氏
○由来・特色

十二所城下町は、元和元年（一六一五）赤坂氏に代わって十二所代官に任ぜられた塩谷義綱氏が、葦の生い茂る湿地帯（現在の十二所町）を埋め立てて造ったもの。侍屋敷や町人町の地割りを行い、武士や町民の居宅を集めました。その際、十二所給人野内氏が自分の屋敷に植えた樅が、現在の吉成家にある樅だといわれています。この敷地は、野内氏から成章書院へ、そして月居氏へと移りました。明治時代になって月居氏は葛原へ転居し、吉成氏が所有することになりました。

この樅の木は推定樹齢約三百五十年、樹高約二十㍍、胸高周囲約四㍍。周囲の樹木に比べてひときわ高くそびえ立つ姿は正に地域の象徴的存在であり、三百五十年も前から十二所町を見守ってきた歴史的シンボルです。

成章小学校のすぐ近くにあるため、小学校時代を懐かしんで樅の木を見上げる人も多いようです。地域の人たちには、「吉成のオンコの木」と呼ばれ親しまれています。